

事例 5

タイトル: 自分の「よるべなさ」をわかってほしい

・ <事例の状況>

80代半ばになるAさん(女性)は独居である。ここ数年の間に「うっかりミス」が激増して自信を失ってしまった。自分の「よるべなさ」を嘆き、何とかして今のうちに適切なケア、治療を受けたいと願っているが、かかりつけ医も、「まだしっかりしている。」と話を真面目に聞きいてくれない。娘も、「お母さんはまだまだ大丈夫。」と聞く耳を持ってくれない。介護保険の申請時には持病の腰痛で要介護1が出たが、自分の願いは体の面ではなく、この「物忘れ」を何とかしたいことと、このやるせない気持ちを真面目に聞いてほしいことである。日々の生活は自立している。

【この事例で課題と感じている点】

要介護認定を身体面では受けていながら、本人の「物忘れ」に対する不安を聞いてもらう場所がこれまでになかったこと。

介護保険のサービスでは、「相手にしてくれない」こと(大丈夫と言われてしまう)。

・ <キーワード>

認知症への不安。 よるべなさ。 利用できる所がない。

・ <事例概要>

【年齢】 80代半ば

【性別】 女性

【職歴】 病院看護職として20年間勤務後退職

【家族構成】 独居 一人娘は独立して家庭を持ち他県在住

【認知機能】 HDS-R 19点

【要介護状態区分】 要介護1(腰痛のため)

【認知症高齢者の日常生活自立度】

【既往歴】 腰椎圧迫骨折

【現病】 腰痛症(整形外科外来受診) アルツハイマー型認知症(確定診断 大学病院と2医療機関)

【服用薬】 オパイリン(鎮痛薬 屯用)

【コミュニケーション能力】 自らの意思ははっきりと伝えられる。

【性格・気質】 気難しい。 生真面目。

【ADL】 腰痛時以外はほぼ自立

【障害老人自立度】 A1

【生きがい・趣味】 これまで仕事一筋に生きてきて無趣味。

【生活歴】 長女として生まれる。現在は、本人以外は亡くなっている。夫とは20年前に死別。腰椎の圧迫骨折までは何一つこれといった病気を経験していない。病院勤務退職後、何一

つ不自由なく生活を送ってきた。娘は仕事についており、自らの家庭があるためにAさん自ら、「迷惑をかけたくない。」と時々連絡をしている程度。

【人間関係】 自立心が強く、これまでの人生でほとんど人の意見を聞く立場ではなく、困った人を支援する立場を貫いてきた。突然の不安を周囲の人に伝えても、「まさか、あなたに限ってそのようなことはない。」と聞いてくれないために、最近では人と付き合うのが嫌になってきた。それ以前は知人も多く指導的立場を全うしてきた。

【本人の意向】 自分のこの気持ちを誰かわかってほしい。介護保険の手続きは終わったけれど、今の自分をわかってくれて、気持ちに沿ったケアをしてくれる場所がない。

【事例の発生場所】 医療機関